16. 体質性黄疸の肝・胆道シンチグラフィ(Dubin-Johnson 症候群と Rotor 病の各1例)

濱田　典彦　吉村　尚子　寺島　正子
吉田　大輔　吉田　祥二　(高知医大・放)
赤木　直樹　(同・放部)

体質性黄疸の Dubin-Johnson 症候群と Rotor 病の各1例に対し，^{99m}Tc-E-HIDA (以下 HIDA) および ^{99m}Tc-PMT (以下 PMT) を用いて，肝・胆道シンチグラフィを施行した．

Dubin-Johnson 症候群では，HIDA にて肝摂取正常，胆道排泄障害のヘパトグラムを，PMT にて肝摂取・胆道排泄ともに正常のヘパトグラムを呈し，両者の解離が診断に有用であった．

Rotor 病では，HIDA は肝への移行が見られなかったが，PMT は肝に僅かに摂取され，胆道系への良好な排泄が描出された．PMT は本疾患の病態把握に有用であった．

17. 膵腫瘍に対する ^{201}Tl-SPECT の経験

菅野　文め　菅　一能　内迫　博路
松井美補子　久米　典彦　清水　建策
中西　敬　(山口大・放)
濱崎　達憲　鈴木　敞　(同・二外)
宇津見博基　山田　典將　(同・放部)

良性腫瘍2例を含む膵腫瘍25症例について ^{201}Tl-SPECT を施行したところ，23例の膵癌中20例で集積を認め，良性腫瘍1例でも集積を認めたが，良性腫瘍では腫瘍／肝集積比がやや低値であった．手術による摘出標本では，腫瘍部の放射活性は非腫瘍部より明らかに高く，腫瘍組織での ^{201}Tl 取り込みが増大していることが窺われた．また，腫瘍／肝集積比は治療前後で CA19-9 の変動とよく相関していた．診断能の向上のため絶飲食は不可欠であるが，^{201}Tl と ^{99m}Tc の2核種同時投与によるサブトラクション画像も有用であった．

18. 消化管出血の核医学検査

内迫　博路　菅　一能　松井美補子
定永　雅子　久米　典彦　清水　建策
中西　敬　(山口大・放)
宇津見博基　山田　典將　(同・放部)

消化管出血の部位診断を目的に核医学検査が施行された症例について retrospective に検討した．対象は1983年3月～1993年4月に当施設にて核医学検査を施行された22例で，使用した核種は ^{99m}Tc-RBC 9例，^{99m}Tc-HSA-D 7例，メッケル憩室を疑い $^{99m}TcO_4^-$ を使用した6例であった．結果は22例中11例にシンチ上陽性所見を認め，それらはすべて小腸以下の下部消化管からの出血であり，特に小腸出血の検出に有用であった．なお陰性所見であった11例中8例は経過観察後軽快した．本検査は特に小腸を含む下部消化管出血の部位診断に有用であると考えられた．

19. 腹部におけるガリウムシンチグラフィ

定永　雅子　菅野　文め　清水　建策
松井美補子　久米　典彦　内迫　博路
菅　一能　中西　敬　(山口大・放)

腹部のガリウム集積例161例について，その臨床的意義を検討したところ，有病率は91.9%，腸管集積例については44%が無病誤診であった．肝集積像でリング状や不均一な集積を示した肝転移例を認めた．膵臓・膀胱のように多方向からの読影が集積部位の確認に有用な症例もあり，生理的集積との鑑別に役立つものと考えられた．水腎症や腎機能低下例にてガリウムの集積を認め，診断・経過観察の補助診断として有用であることが示唆された．膀胱の異常集積は病変を反映したものと考えられ，他の小骨盤領域の異常集積でも無病誤診例はなく，診断上注目すべき所見と思われた．

Presented by Medical*Online